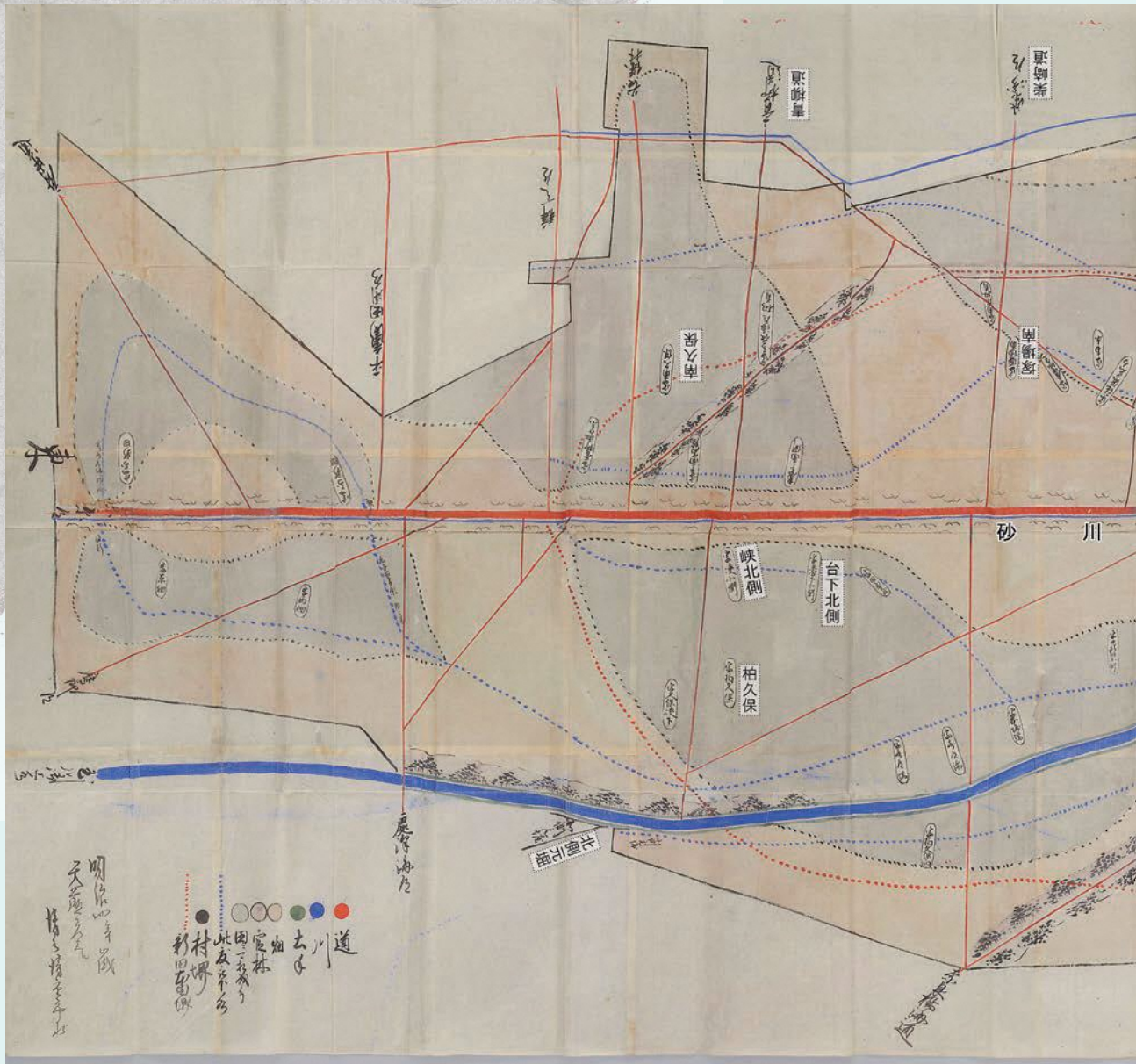


資料をよむ

～「武蔵国多摩郡砂川村^{あら}鹿絵図面」に見る砂川の田用水と水田～
立川市史編さん委員 小坂克信



1. はじめに

「砂川に水田があった」というと驚く方がいるかもしれませんが、明治4（1871）年の「武蔵国多摩郡砂川村^{あら}鹿絵図面」（以下、鹿絵図面とする）には、砂川村の水田と田用水の予定地が描かれています。この鹿絵図面は砂川六番（台上）の清水家の旧蔵で、大きさは縦940mm、横2,050mmで四方位が示されています（上が南）。

2. 何のために描かれたのか

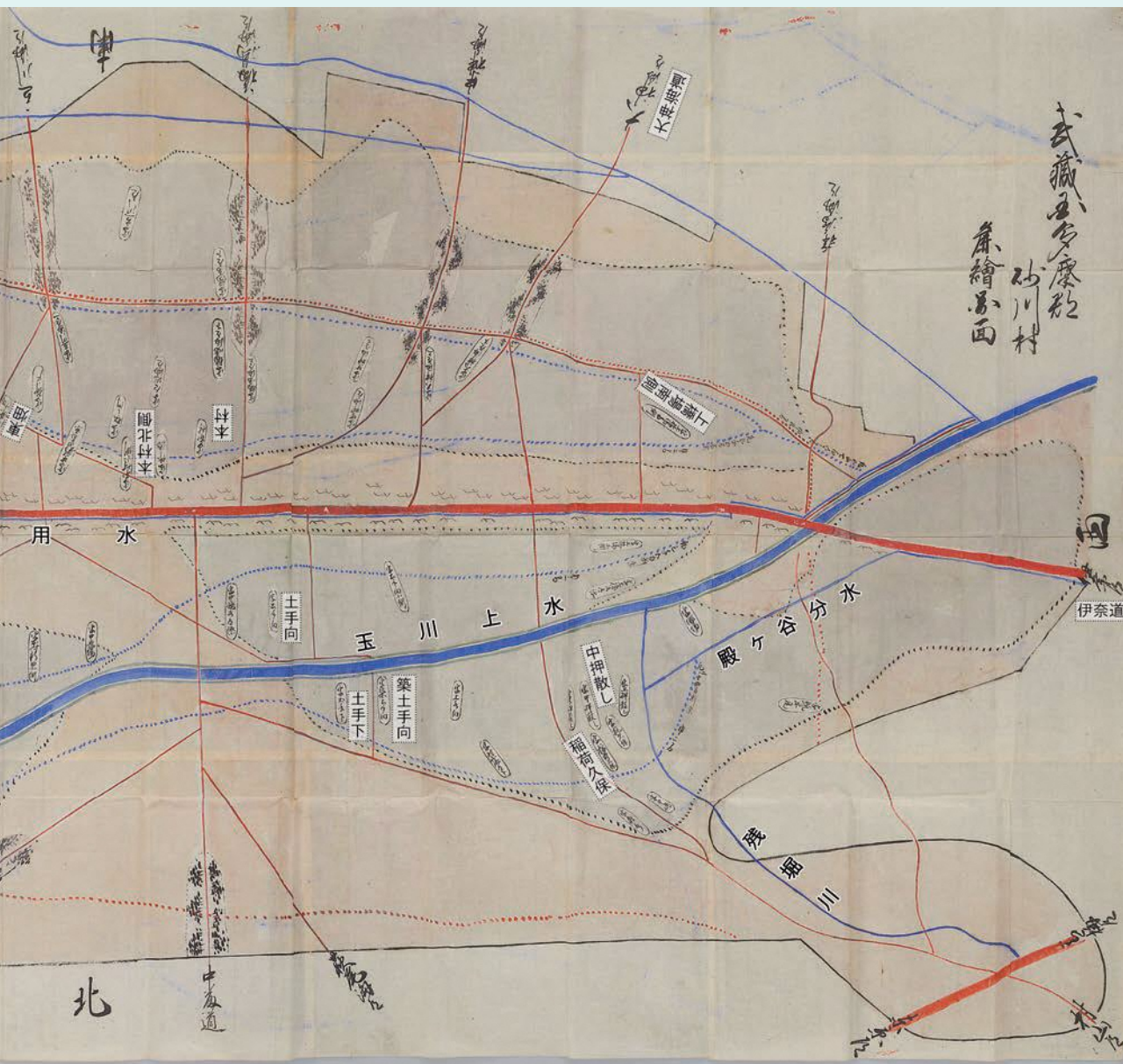
この絵図が描かれる約1年前の明治3年6月、土木司は34あった玉川上水の分水口を半分の17に統合します。この時、水量は「飲み水は100人につき1坪（1寸〔約3cm〕四方から入る水量）」などと決められ、ほとんどの分水で減らされます。例えば、柴崎分水は150坪から52.5坪、殿ヶ谷分水は64坪から24坪になります。増水願いが多く出されますが、認められませんでした。

しかし、実際には水が余ったようで政府は新田開発を計画し、砂川村はこれに応じて願書と絵図面を提出します。この控えが鹿絵図面で、新田予定地とそこに給水する用水を得るために描かれました。この願いは、明治4年5月東京市が水不足になった時は、田用水を止めることを条件に500坪が許可されます。他に許可されたのは殿ヶ谷分水30坪、深大寺分水169坪2合、福生分水16坪7合5勺、田無分水113坪です。当時、砂川用水は分水口の統合によって、現在の昭島市から三鷹市まで流れていました。その流末に深大寺分水が新設されたので、調布市の野川までつながります。

3. 絵図からわかること

鹿絵図面の中央には伊奈道（五日市街道）と砂川用水が描かれ、その南北に沿って家々が並んでいます。砂川村が砂川用水を飲料水や生活用水に使うことで、東西に広がる街村になったことがわかります。また、新田予定地が灰色、そこに給水する田用水が青い点線で描かれています。この水路は、玉川上水の北側に1本、砂川用水の北側に1本（北田用水）、南側に2本（南田用水）、計4本が計画されます。玉川上水の北側は殿ヶ谷分水からの分水で、増水された30坪分です。この水路は幅2間（約3.6m）、長さ2400間（約4,362m）余り、流末は北側元堀（現・小平用水）に流れ込む

平成31年3月に刊行される『新編立川市史 資料編 地図・絵図』に掲載される資料の中から、「武蔵国多摩郡砂川村鹿絵図面」について、編さん委員の小坂克信委員に解説をしていただきました。



本文中に記載のある地名や道の名称を絵図上に表示したもの

水路名

補足のため水路名を追加。絵図作成当時砂川用水は「南側元堀」「南側分水」「南側元樋」などと呼ばれていたようです。

予定です。北田用水は砂川一番で砂川用水から分かれ幅2間、長さ3500間（6,363m）で、途中2カ所で分岐し、1本は掛け樋で砂川用水の南側を潤す計画です。

この水田や水路の場所を示すため、大神海道や青柳海道、柴崎道などの道が朱で描かれ、現在では使われていない地名が記されています。例えば、南田用水は上橋場南側の西で2つに分かれ、北の分水は本村、本村北側、東畑、塚場南などを流れます。この他、土地の高低差を示す台下北側や峽北側、窪地を示す柏久保や南久保、稲荷久保などの地名が記されています。また、見影橋下流の玉川上水は、河岸段丘で下流の土地が高くなっています。そのため、上流に土手を築いていますが、この付近の地名は築土手向、土手下、土手向などです。

4. 他の資料と比べて

「皇国地誌、村誌」（『砂川の歴史』）には、次頁の表のように明治10（1877）年頃と推定される4本の田用水、合計5597間（約10,175m）が記されています。水田の面積は5町7反5畝26歩で、鹿絵図面には水田予定地が広く描かれていますが、砂川村の耕地面積のわずか0.7%に過ぎません。

明治10年6月東京市の飲料水不足で、田用水の水量は半減されます。つまり、砂川用水は250坪、殿ヶ谷分水は15坪になります。そこで、砂川村では全ての田に水を行き渡らせるように、同年10月4本の田用水を甲から戊までの5本に分けます。その後も開発は続けられ、明治31（1898）年4月には水田が9町4畝13歩に増えています（砂川村役場文書）。しかし、明治40（1907）年頃、東京砲兵工廠に分水を売却したので、砂川用水からの水路と水田はなくなります。

5. 他の絵地図と比べて

「砂川村絵図」には砂川用水が砂川八番で南下する、明治3年6月の統合前の姿が描かれています。この絵図にも道路と地名の範囲が示されていますが、鹿絵図面とは必ずしも一致しません。また、当時は残堀川が玉川上水に合流され、その北側は時に水があふれたことから「押散し」と呼ばれましたが、位置もやや異なります。

明治25（1892）年「武蔵国北多摩郡砂川村面積」には、砂川村の田用水が描かれています。現在の地図と比べると、

例えば天王橋の南、1つ目の信号から東にある第九小学校までの道路が南側田用水の跡になります。

このように他の絵地図や資料と比べることで、私たちが生活している場所が、以前どのように利用されていたのか知ることができます。平成31年3月に『新編立川市史 資料編 地図・絵図』が刊行される予定です。ぜひ手に取って、まちの歴史を探ってみましょう。

明治10年頃の砂川村の田用水と水田

田用水名	分岐点	長さ	幅	深さ	水田の場所と面積
南側田用水	甲	拝島道南	2005間 (3,645m)	3尺 1尺	大山西 9反8畝10歩
北側田用水	乙	上水内	1175間 (2,136m)	3尺 1尺	上水内 3町1反9畝6歩
下南側田用水	丁	江ノ島道西	1260間 (2,290m)	3尺 1尺	江ノ島道西 7反
下北側田用水	戊	川越道西	1157間 (2,103m)	3尺 1尺	川越道西 8反8畝10歩

(「皇国地誌、村誌」『砂川の歴史』から作成)

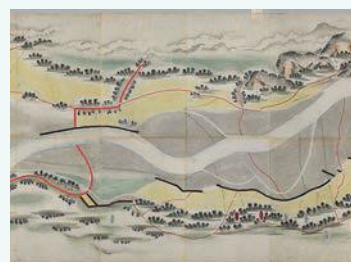


新編立川市史 刊行物紹介 ～平成30年度(2018) 刊行予定～

○新編立川市史 資料編 地図・絵図

明治時代から平成までの立川市内の主要な絵図・地図資料を掲載します。時代の変遷によって立川の街並みがどのように変化してきたか全体地図(全図)で振り返ります。また、立川飛行場や交通網の発達、商店街の形成など個別のテーマについてもコラムとして取り上げます。付録のDVDには高精細なデータを収録して刊行する予定です。

平成31年4月頒布予定 A4判・フルカラー・約200頁・上製本・頒布価格未定



多摩川流域村々絵図
(明治3-4(1870-1871)年)

○新編立川市史 調査報告書 民俗・地誌編1

砂川青年団資料集 ―青年団誌『いづみ』・戦後砂川青年団についての座談記録―

基地闘争の時期を含む戦後約10年程の『いづみ』(砂川青年団の機関誌)[影印]と、砂川青年団についての座談会(当時の青年団長経験者等)記録を収録。戦後青年団とともに激変する生活や地域社会の様相を読み取ることができる資料を刊行します。

平成31年4月頒布予定 A4判・500頁・並製本・頒布価格未定



砂川村青年団機関誌
『いづみ』6号
(昭和29(1954)年)

○新編立川市史 調査報告書 先史編1

向郷遺跡調査報告書 ―竹内勇貴氏寄贈資料―

竹内勇貴氏寄贈資料は、向郷遺跡で発掘された縄文時代中期前半勝坂式期の良好な一括資料です。土器・石器の観察のほかに、土器胎土の岩石学的分析・蛍光X線分析や種実圧痕レプリカの分析なども行い、向郷遺跡の理解が深まりました。

平成31年4月頒布予定 A4判・約200頁・並製本・頒布価格未定



向郷遺跡出土
竹内勇貴氏寄贈資料
あたまだい
(阿玉台式土器)

～既刊～

○新編立川市史 調査報告書 近世編1 鈴木家文書目録

平成30年3月刊行 A4判・250頁・並製本・頒布価格1,000円

※立川市史刊行物は以下の場所で頒布しております

○立川市市政情報コーナー

立川市泉町1156-9 立川市役所3階

○立川市歴史民俗資料館

立川市富士見町3-12-34

